20200927レムナント教会1部

**ダビデの悔い改め(詩篇51:1-19)**

　人は罪を犯したり、犯罪に走ったり、何かの過ちを犯した場合、普通はそういったことを合理化しようと動きます。あるいは、そのことによって罪責感、良心の呵責などにずっと縛られて生きるようになります。それが辛いのでどうにかしてそれをお返ししようという意味で、つぐないを通してその問題にアプローチしようという動きなどがあります。すべてがある程度一理のある動きに間違いありません。しかし、そういうことではサタンには絶対に勝つことができません。目に見えない霊的な世界が分かっていないがゆえにそういう動きしかできませんが、何も役に立たないどころか、さらに状態はねじ曲がり、ひどくなるだけです。人間は誰しもが弱さを抱えているし、何かのきっかけによって倒れることもあります。問題はそういうことがあるかどうかではなくて、それを正しく処理しないと一生それに捕らわれて生きるしかないということです。その過ちや失敗などを正しく処理しないと、結局自分自身を許すことができないし、また他人も許すことができません。つまり、受けいれることができないというようなことを背負って生きるしかないということです。

　今日の聖書の箇所、詩編51篇というのは、いちばん最初の部分に「ダビデがバテ・シェバのもとに通ったのちに、預言者ナタンが彼のもとに来たとき」と書いてあります。ダビデが人の妻を犯し、また殺人教唆の罪を犯していたときに、神様はナタンという預言者を送って、ダビデの罪、犯したことに対して知らせることになります。そのときにダビデは預言者の話を聞いて、つまり、神のみことばの前に立って、そこで悔い改めることになりました。その内容が詩編51篇の内容にあたります。ダビデは確かに法律から見たときにはとんでもない犯罪者になりました。到底許されることではありません。しかし、ダビデはそれを法律の前で処理したのではなくて、神の前に立って、神様のみことばの前に立ったということが希望あることでした。つまり、ダビデの悔い改めを通して、神様が今を生きる私たちに語っていらっしゃるメッセージです。それはその過ち、罪が大きいか小さいかは関係なく、その犯した罪はまことの悔い改めの時間になります。その失敗、犯罪というものは、神の前に立ってまことの悔い改めに向かうための材料になるということがメッセージになります。ダビデはこの悔い改めの中で、まず「主の前に私は罪を犯しました。神に対して罪を犯しました」という告白をしています。詩編51：4にも「あなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを」という表現をしています。Ⅱサムエル12：13にも、「ダビデはナタンに言った。「私は主に対して罪を犯した。」と告白しています。法律も大切なのです。人間の良心も無視できません。しかし、人が罪を犯して何か悪に走ったときに、何か倒れて失敗したときには、法律や自分の良心、道徳、倫理のような法則の前に立つのではなくて、主の前に、神の前に立つということがまことの悔い改めというものです。つまり、自分の過ち、問題を霊的な目で見たということでしょう。主の前に立つということは、神のみことばの前に立つという意味でもあります。これこそがまことの悔い改めという行為です。

　そして、そのように主の前に立つ、神のみことばの前に立つようになりますと、徹底的に自分の根本を発見するようになり、それを心から素直に認めるようになります。それを悔い改めると言います。つまり、自分の根本を発見し、それに目を留めるようになるということは、自分が犯した行為、またそのことによって現れた現象以前に、それに目を留める以前に、今まで気づいていなかった自分の根本に目を留めるようになること、これこそがまことの悔い改めということです。今日の聖書の5節にも、ダビデはこの犯罪を犯したあと、主の御前に立って自分のことをこのように告白しています。「ああ、私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごもりました」。これが本当の私という存在なのだという告白です。過ち、失敗、罪を通して、自分がどんな存在なのかに気づくようになることです。これこそまことの悔い改めというものです。3節にも「まことに、私は自分のそむきの罪を知っています。私の罪は、いつも私の目の前にあります」と書いてあります。今ダビデが話している内容は、私は頭から足の先まで罪以外には何もありませんという告白なのです。自分はそのような存在です。パウロが教えていたように、エペソ2：1「自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって」、だから自分は自分なりに頑張るつもりなのですが、目に見えない空中の権威を持つ支配者、悪魔、サタンに従って、世の風習に縛られて生きる存在でした。生まれながら神の御怒りを受けるしかない者でした。それが聖書に書いてある文字ではなくて、自分自身ですと認めて告白することを悔い改めと言います。ダビデは大きな罪を犯すことによって、今まで良い信仰の道を歩んでいましたが、素直に率直に自分がこれほど地獄の子だということは認めていなかったでしょう。それに初めて素直に気づいて認めることになります。このような内容をまとめて一言でイエス様がおっしゃいました。ヨハネ8：44、「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって」と書いてあります。私が知っている限り、教会に通って一生懸命信仰生活をしているクリスチャンの99％は、この聖書のイエス様の話を自分のことだと認めていません。なのでメッセージが届かないのです。神の聖書はこのような根本を土台にして、根拠にして、それに基づいて語られているものなので、メッセージがいつも上の空のようになって、いつも空回りするわけです。せっかく教会に来て礼拝を捧げて、メッセージを聞いているのになんと残念なことでしょうか。パウロはローマ3：13-15で、このように人間のことを語っています。「彼らののどは、開いた墓であり、彼らはその舌で欺く。」「彼らのくちびるの下には、まむしの毒があり、彼らの口は、のろいと苦さで満ちている。彼らの足は血を流すのに速く」。これが遠いローマ人への表現だと思うのでしょうか。これこそが自分なのだと心から認めること、それを悔い改めと言います。自分でも今まで律法に徹底していて、神様に従っている立派な信仰者だと勘違いしていたそのパウロが、本当に自分を発見したときには、このように自分のことを言います。Ⅰテモテ1：15、「「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです」。それから、Ⅰコリント15：8、「そして、最後に、月足らずで生まれた者と同様な私にも」と自分のことをそのように表現しています。ローマ7：24、「 私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか」。自分のことを死のからだと表現しています。自分の根本が何か、それに気づくようになったということでしょう。これに気づいた者は、自分の口をシャットアウトするようになります。文句が言えません。意見もありません。感情も何もかもがすべてが下ろされるようになります。これが悔い改めというものです。それが正しいかどうかということも意味を失うようになります。誰のせいなのか、どっちが悪かったのか、良かったのかというようなすべてのことが意味を失うようになります。このような心の状態をダビデは今日の詩編51：17において、このように言っています。「神へのいけにえは、砕かれた霊、砕かれた、悔いた心」。イエス様も山上垂訓の方で「心の貧しいものは幸いです」とおっしゃいました。その貧しい心の意味が、今申し上げました悔い改めの心の状態です。小さいか大きいかは関係なく、自分の過ち、犯した罪、失敗というものはよろしくありませんけれども、このようなまことの悔い改めの機会なのです。ですから、すべてシャットアウトになり、一つしか残りません。ただイエス・キリストの十字架だけを頼りにして、イエス・キリストの十字架だけを見上げるようになります。これが悔い改めというものなのです。今日の悔い改めの詩編の中で1節を見ますと、ダビデも「神よ。御恵みによって、私に情けをかけ、あなたの豊かなあわれみによって、私のそむきの罪をぬぐい去ってください」と言っています。ぬぐい去る。あわれみ。そして、7節には「 ヒソプをもって私の罪を除いてきよめてください」とあります。そのヒソプというのは、過ぎ越しの血を付けて門柱に塗っていたその植物の話です。これがすべてキリスト・イエスの十字架を象徴する内容ではないでしょうか。また、8節には「あなたがお砕きになった骨が」と書いてあります。本当は死刑囚を殺したあと、最後の確認のために骨を折ります。イエス様が十字架にかけられたときにも、ローマの兵隊たちがイエス様の骨を折ろうとしたときに、もう折る必要がないほど確実に死んだということを確認したので折らないで終わったとあります。もちろん預言どおりですが、骨が折る、砕かれたという内容もイエス・キリストの十字架を意味するわけです。人間の罪、人間の弱さ、失敗というものは、まことの悔い改めのための機会なのです。まことの悔い改めということは、主の御前に立つことで徹底的に自分の根本を発見し気づいて、そして、ただイエス・キリストの十字架だけを見上げ、イエス・キリストの十字架だけを頼りにする心の状態を意味します。

　そして、神様はこのようなまことの悔い改めを通して、まことの人間を回復させます。ダビデは1節においても、「そむきの罪をぬぐい去ってください」、また2節を見ても「洗い去り」「きよめてください」という表現があります。4節を見ますと「あなたの御目に悪であることを行ないました。それゆえ、あなたが宣告されるとき、あなたは正しく、さばかれるとき、あなたはきよくあられます」とあり、きよくという表現があります。また、9節を見ても「御顔を私の罪から隠し、私の咎をことごとく、ぬぐい去ってください」というような表現を通して、神様はまことの悔い改めによって、まことの人間を回復します。まことの人間というのは、本当の救いを確認して、その救いの確信を持つということです。それが人間という存在です。イエス様は最後の晩餐のときに、ヨハネ13：10において、わたしのことばによって、あなたはもう「全身きよいのです」と宣言されました。パウロもそのことをもってローマ8：1-2、もう二度とキリストにあって「罪に定められることは決してありません」。「いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放した」と宣言しています。エペソ1：4には、「すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前から彼にあって選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました」。まことの悔い改めを通して、まことの救いを確認して、救いの確信を持つようにされます。そして、その救いの確信を持ったときに、ダビデのようにそのような大変な罪を犯したのにもかかわらず、心からその救いによる感謝と喜びと賛美があふれるようになります。その救いの感謝と喜びと賛美による献身というものが、本当の意味での献身です。12節「 あなたの救いの喜びを、私に返し、喜んで仕える霊が、私をささえますように」。14節「神よ。私の救いの神よ。血の罪から私を救い出してください。そうすれば、私の舌は、あなたの義を、高らかに歌うでしょう」。15節「主よ。私のくちびるを開いてください。そうすれば、私の口は、あなたの誉れを告げるでしょう」。これが人間です。まことの人間というものは、罪のない聖い人間ではなくて、その罪が聖くきよめられて救われたということを確認して、その確信の上に立って、その救いから与えられる喜びと感謝と賛美にあふれるようになること、これが人間というものなのです。神様はとんでもない罪を犯した人間に悔い改めを許されることによって、このようにその罪を犯す以前よりはるかに優る人間として回復を与えられるお方です。そうするとその人は、10節「 神よ。私にきよい心を造り、ゆるがない霊を私のうちに新しくしてください」。11節「 私をあなたの御前から、投げ捨てず、あなたの聖霊を、私から取り去らないでください」。どういうことなのでしょうか。救いの喜びにあふれている者は、これからの人生の歩みというものは、自分の力ではなくて、聖霊の力によって、聖霊充満を慕い求める心になります。聖霊充満を求める人を人間と言います。それがまことの人間という存在です。

　そして、最後にその人は、13節「私は、そむく者たちに、あなたの道を教えましょう」。それから、15節「主よ。私のくちびるを開いてください。そうすれば、私の口は、あなたの誉れを告げるでしょう」。18節「どうか、ご恩寵により、シオンにいつくしみを施し、エルサレムの城壁を築いてください」。これはどういう話なのでしょうか。悔い改める人は、本当の意味で正しく悔い改める人は、まことの人間を回復するようになりますが、その心にこれからイエスの福音をもって人を助け、たましいを生かす伝道者の人生を歩こうという心を抱くようになります。その人の心の中に、私の残りの生涯はイエスの証人として、人のたましいを、暗やみに捕らわれて偶像崇拝に縛られて、運命に捕らわれて、悪魔、サタンに支配されているたましいを助けることこそ、私の人生の生きる理由ですと気づいて、それを心から喜んで決心する人、それを人間と言います。そうなるまでは本当の意味での人間とは言えません。いつそれがそうなるのかと言いますと、法律から見たときには、とんでもない許されない罪を犯したあと、それが神の御前に立たされることによって、まことの悔い改めの方向に向かい、その悔い改めることによって、そのようなまことの人間に回復されるようになるということです。これが神様の不思議なプロセスです。神様の不思議な導きというものです。ダビデの悔い改めを通して、何が悔い改めで、また私たちの罪や失敗、過ちをどう処理すべきなのかという答えをしっかり握って騙されないようにしましょう。

　改めて申し上げます。大きいか小さいか関係なく、失敗、過ちを犯した場合は、今までに触れていたすべての法則を無視してください。二つの中の一つなのです。それが正しいかどうか、法律に合うかどうかではなくて、サタンを喜ばせるのか、そうでないのかです。サタンを喜ばせるというのは、キリストを隠すということです。そうでなければイエス・キリストが実際的に自分の中でオンリーキリストになるようにそちらに向かうのか、どちらかの一つです。キリストオンリーの方に向かうこと、それを悔い改めるというのです。神様は私たちを捨てることはありません。悔い改めるという祝福を用意して、そちらの方に憐れみをもって導かれる方です。そうでなければ、どんなに理屈に合うことであっても、結局サタンを喜ばせることになります。

　それから、小さいか大きいか関係なく、どのような過ち、失敗でも、心にしこりとして残してはいけません。周りから見ると、あの人は良心もないのかと思われるかもしれません。良心ではサタンには勝てないと私たちだけが分かっているので、だから、倫理に囚われず、心に過ちや失敗のしこりを残してはいけません。まるでそれが立派な善良な良い人間のように皆思われていますが、それはそれでいいです。しかし、霊の世界が分かっている限りは、それでは無理なのです。ですから、心のしこりとして残してはいけないのです。むしろどのような過ち、どんな失敗でも、それが小さいか大きいか関係なく、賛美と感謝の材料にしなければいけません。そうでない限り、サタンに勝てません。罪、失敗、過ちは、それをはるかに上回るキリストの恵みをおあかしする道具にしないといけません。このことばが皆さんのものになり、ぜひ理解できるようになることを祈りたいと思います。ローマ5：20-21「律法がはいって来たのは、違反が増し加わるためです。しかし、罪の増し加わるところには、恵みも満ちあふれました。それは、罪が死によって支配したように、恵みが、私たちの主イエス・キリストにより、義の賜物によって支配し、永遠のいのちを得させるためなのです」。つまり、罪多いところには、恵みはそれよりもっと多いというのが、イエス・キリストの教えであり、聖書であり、福音というものです。騙されないようにしましょう。ダビデの悔い改めを通して、すでに神の子どもとして召され、これから47都道府県、教会を開拓して、237カ国未伝道種族に宣教を行っていくべき私たちがなにものにも引っかからないで、たとえ失敗でさえそれが切り替わって私たちに益となるその福音の中に深く入っていかないといけません。その祝福を存分に味わうことを祈りたいと思います。

（祈り）

恵み深い天の父なる神様。到底許されることのできない罪を犯したダビデが、主のみことばの前に立って、すべての法則や良心までもあとにして、まことの悔い改めを通して、イエス・キリストだけを見上げ、そして、回復の喜びをもって残りの生涯、伝道者として改めて固められていることを今日教えられました。どうか今まで学んできて、聞いてきていたそのすべての法則から自由になってイエス・キリストの前に立つことができるように、ひとりひとりの弱さがキリストオンリーの材料になるように聖霊様がみことばを通して働いてください。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。